豚が飛ぶ

藍原

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
豚が飛ぶ

【Ｎコード】
Ｎ２３４６Ｋ

【作者名】
藍原

【あらすじ】
ちいさな異変がおこった、学生のはなし。

（前書き）

全体的に登場人物に関する性別以外の描写が少ないです。
自由に想像してよんでください。

ある日病気になった。理由ははっきりしない。

病気というには語弊があるかもしれない。苦痛はない。異常ではある。

授業の始まる２０分前になって、やっと身支度が整った。

教室まで徒歩１５分。急げば１２分弱。

電源火元窓際の戸締り確認。講義に使う教材も資料も持った。

火元をもう一度確認。

小心者みたいだけど習慣だからしかたない。窓の鍵を確認しに行ったところで腕時計を忘れたことに気付いた。

見つけた時計を巻いたのはもう授業の１７分前だ。

狭い室内を防寒着で歩き回ったせいで薄らと汗をかいている気がしたけれど、そのまま部屋を出た。

余計なことだが玄関の鍵の確認は2度した。

冬場の外のかぜは油断すると項をもってかれそうなくらい冷たい。

そういう表現をしたらなんだかおかしな目で見られたのはもう結構前のことだ。

今も何かを例えると少数派の扱いを受けることが多い。

少し前に病気になってからはそういったことを口に出す機会自体減ったので奇異な目で見られることも少ないけれど。

直接触れる風のせいで顔面の皮膚が引き攣った。

寒いんだろうなぁ、と思うのは他人事だからだ。寒くない。

通学路を半分程進んだところで時間があと7分しかないことに気付いた。

走るのは、苦手だ。昔から。

昔は単に疲れるのが嫌だった。足が痛い、のどが痛い、苦しい。そ

もそも走るのがおそい。

言い訳を考える間に2分たったので仕方なく地面を蹴った。

思い切り吸い込んだ酸素に、肺がおかしな音をたてる。ぐう。

こんな時ばっかりは、病気に感謝だ。

危険なことである、という意識はある。けれど、危険を伴う利便性によりかかるのは、人間の性ではないのか。

そんなことばかり、考える。

教室に着くころには全身にうすく汗をかいていた。

先に来て席をとっておいてくれた友達に心配そうな顔でみられた。申し訳ない。このときばかりは、心がいたい。

「大丈夫なの。」

眉をひそめてちいさく囁いてくるのは、中学からの付き合いの親友だ。

彼女はしっかりしているので基本的に遅刻はしてこない。こんなぎりぎりの時間に、駆け込んでくることも、ない。

「汗が？何が？」

「ばか、病院に、行ったんでしょ？」

どうやら心配ごとは、今のわたしの湿っぽい体でも、単位のことでもなかったらしい。

冷たい目に無言で責められるのは辛い。

「うん、心因性かも、てくらい。」

原因はわからなかった。お医者さまには。

そういうと、彼女は難しいかおをした。

また申し訳ない気分になる。ごめんね、実は理由は大体わかっているのです。

ある日病気になった。理由ははっきりしない。

けれど、わたしはなんとなくわかっている。人には言う気になれないけれど。

ある日、わたしの体から痛覚というものが消えてなくなった。
ほかの感覚はある。たとえば味覚とか。
けれど、痛覚がないので、辛いものは味がしない。
あと、気温なんかを感じ取ることができなくなった。
風呂が水なのかお湯なのかわからないまま入浴して、結局水だったらしく風邪で寝込んだことは記憶にあたらしい。
それを彼女に言ったら、ものすごい剣幕で病院に行って来いと言われてしまった。
で、滅多に使わない保険証を持って総合病院に行ったのが、昨日。

「心因性、てことは、何かストレスを感じるようなことがあったんでしょう。」

気づいたら学食にいた。
むかいに座っているのはやっぱり親友だった。遠くにほかの友達が見えるということは、わざわざふたりで話すために離れて座ったらしい。

「そうかもね。」

目の前には焼いた餅ののっかったうどんがあった。無意識のわたしが力うどんをたのんだ理由はなんだろうか。

無駄なことに思考がいくとすかさず親友のツッコミが入った。

「聞いてるの。」

「……聞いてる。」

「そういうことがあるんなら、なんでわたしに言ってくれないの。」

悲しそうに、しかし確実に怒っている彼女の腕の中にはわたしと同じトッピングの蕎麦がある。力そば。そんなのあるんだ。

「……いやぁ、実際じぶんでもわかんなくってさぁ。」

わたしがそんな、ストレスとか。

白々しいくらい棒読みになってしまったので怪しまれるかな、と思ったら案外あっさり「そうだね。」とうなずかれた。

ほっとしたけれど、何だと思われているのかしらと思わないことも

なかった。複雑な気分だ。

近くに置いてあった湯呑をつかもうとしたら、その手がやわらかく押し退けられた。

押し退けた手は、当然のことながらわたしのものではない。むかいに座る親友のものでもなかった。

「……」

見上げた先には、無駄に背のたかい、男。

「これ、まだあっついと思うから飲めないぞ。」

「あ、そうだよー亜砂。食堂のお茶は殺人的に熱いんだから、もっと冷まさないと。」

「……はぁ。」

「気をつけろよ。」

偉そうに言い放って、男はわたしの隣に座った。

なんとなくぼんやりしている間に、親友と男は楽しそうに会話し始める。けれど、その声がわたしの耳に入ることはなかった。

誰にも言っていないけれど。これも病気のひとつだ。

男の方はわたしの幼馴染だった。

気づいたら一緒にいて、ずるずる仲良くして、気づいたら同じ大学にいた。そんなかんじ。

そしてこの男が、わたしの病気の原因だった。

いや、正確に原因をいえば、わたしが悪いのかもしれない。それさえ、さだかではない。

幼馴染という関係を１０年以上続けていたら、なんの間違いなのか、わたしはこの男に恋をしてしまった。

きっかけはほんとに不明だ。わからないことばかりで申し訳ない。

ただ、「気づいたら一緒にいました」と同じノリで、「気づいたら好きになってました」ということが起こってしまったというだけの、それだけの話だと思う。

気づいたらどうしようもなく、ほかには何もいらないくらい、わたしはこの男が好きになっていた。

それだけの、話だった。

病気を自覚した日の、前の日。
彼はわたしの住むアパートにやってきて、言った。
「俺ね、由生さんが好きだわ。」
突然だけれど由生さんとはわたしの親友の名前だ。
つまり、その日彼はわざわざわたしの家にやってきて、別人にむかって告白をするというなんとも妙なことをやってのけたのである。
「……それは由生さんに言わないといけないよね。」
このわたしの返しはかなり核心を突いていたんじゃないかと思う。
このときはまだ、わたしの胸は痛みを感じていた。かわいいもんだ。
彼はその後、心底がっかりした顔をして「そうだね。」と言った。
そして言うのだ。とどめの言葉を。
「とりあえず俺由生さんと仲良くなりたいからさ、亜砂、協力してよ。」

みし、と、音がなったのは一体からだのなかのどの部分だったのか。

つまり、その日わたしの片思いは片思いのまま終わることが決定したのだった。

奇跡でも、起きないかぎり。

奇跡というのは起こらないから奇跡だという時と、実際起こるから奇跡なんだという時とあるけれど一体どっちが正解なんだろうか。

まだ熱いはずの力うどんを一気に流し込んだ。

痛みを感じているからだでは決してできない荒業だった。

たん、と容器をおいてお茶に手を掛ける。

それも一気に飲み干したら、お茶の流れに鉄の味が混じったのに気づいた。

どうやら、やけどした口内の皮膚が破れたらしい。

視線を下げると、さっきまで楽しそうに会話していたふたりがものすごい顔でこっちをみていた。てれる。

「ごめん、けがしたみたいだから、医務室いってくる。」

返事は待たなかった。また聞こえないような気が、したからだ。

人通りの多い学食前を抜けて、何のためなのか人口林の中につくられた医務室にむかっていたら涙がでてきた。

理由はわからない。どこもいたくないという病気にかかっていたから。

あの日病気になった。

原因ははっきりしている。

治る日はきっとこない。

牧場を掛けるちいさなベイブに、空を飛ぶことなんて出来そうにないのだから。

（後書き）

中途半端ですね。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2346k/

豚が飛ぶ

2011年2月2日14時27分発行